Dr Negishi's Assessment Clinic
評価クリニック

リスニング・テストのタスクはどう作る

根岸雅史　Negishi Masashi
（東京外国語大学）

1. リスニング・テストのタスク

英語のリスニングの能力を測るとなると，受験者に英語の音声を聞かせて，その理解を問わなければならない。したがって，リスニング・テストには，「音声テキスト」と「タスク」が必要であるということになる。音声テキストについては，以前の連載（Teaching English Now Vol.13）でやや詳細に取り上げているので，今回はタスクの作り方について考える。

リスニングという行為は，音声言語を聞いて理解をするというものである。したがって，このプロセス自体は，発表技能と異なり，外からは観察することができない。このために，リスニングによる理解が正しく行われたかどうかは，何らかの方法で，その理解の結果を外に引き出さなければわからない。その引き出す手段が，リスニングのテスト・タスクである。

2. タスクはどう作る

リスニングのタスクの作り方は，大きく分けて，2つある。1つは，その音声テキストを聞く現実の場面で実際に実行するようなタスクをテストに再現するものである。もう1つは，そうしたタスクの再現がかなわないような場合に，理解を反映するような非現実的な，いわゆる「テスト・タスク」を課すものである。

現実のタスクを設定するに当たっては，その音声テキストを聞くときに，現実の生活でどのようなタスクを行うか考えてみるとよい。例えば，誰かの住所を電話で聞き取る場面では，その住所を手帳に書き取ったりするだろう。したがって，テストでも，住所を書き取るというタスクを設定するのである。また，授業を聞いているような場面では，ノートをとったりするだろう。だから，テストでは，このノート・テイキングというタスクを設定するのである。こうすることで，当該の音声テキストの理解において求められる言語処理をテストにおいて再現することが期待できる。

これに対して，どこかへの道順を聞き取るような場合，実際の生活では，目的地に向かって歩いて行ったり，車で行ったりするだろう。また，天気予報を聞くような場合の行動は，自分の関心のある（住んでいる？）地域と日時の天気を聞き取って，その天気に相応しい服装をしたり，持ち物を持ったりする。しかしながら，こうした行動をテストの場面で受験者に実際にやらせることは，ほとんど不可能である。そのため，このような場合は，受験者に地図上で行き方を再現させたり，服装や持ち物について書かせたり，選択肢の中から選ばせたりすることが，テスト・タスクとなるだろう。

上述のようなリアル・ライフ・タスクとセミ・リアル・ライフ・タスクは，言語テストとしてはかなりオーセンティシティが高いと言える。しかしながら，その一方で，現実の生活のリスニングの中には，音声スクリプトを聞いても，外から観察可能な何らかの行動を取り立てて起こさないということも少なくない。例えば，一人でテレビやラジオのニュースを聞いていても，ただ聞いているだけで，特にその理解を反映するような行動は起こさないだろう（もちろん，その間にコーヒーを飲んだり，何かを食べたり，言語理解とは特に関係のない行動は起こすかもしれないが）。

こうした場合には，話された内容を別の言葉に「置

き換えた」ものとの一致・不一致を問うことになる。これが別の英語への言い換えの場合もあるし，日本語への言い換えの場合もある。これらの方法は，一長一短があって，別の英語に言い換える場合は，その同義性が問題になるし，日本語に言い換える場合は，同義性のほかにコードスイッチングが問題になったりする。これらの負荷は本来のリスニングとは関係のないものであり，とりわけリスニングの場合は，メッセージが一瞬で流れてくるので，選択肢を短くするなどして，できるだけ負荷を減らす必要がある。

3. どのような理解をタスクで問うか

非現実的なテスト・タスクとしては，多肢選択式やTF式などによる内容一致問題が代表的だろう（これらが「非現実的」なのは，現実の生活の中では，行うことがない行動だからである）。こうした方法はテスト方法としてはなじみがあるために，安易に採用されがちであるが，注意が必要である。これらの問題を作るときに陥りやすいのは，リスニングのどのような理解の能力を測定するかという明確な意識のないまま，内容理解を問う問題を作ってしまうことだろう。しかし，もとより，そのような問題への解答結果を見ても，リスニングのどのような力を持っているのかわからない。

タスクのオーセンティシティを高めると，それが問う理解のレベルは，もっとも自然な理解のレベルとなることが期待される。しかしながら，現実生活で目に見えるようなオーセンティックなタスクを実行しない場合は，非現実的なテスト・タスクに頼るしかないが，そのような場合は，特にどのような理解の能力を見ることを狙っているのかを明確に意識しながら問題作りを行わなければならない。

どのような問題がどのようなリスニング理解の能力を測っているのかを知るためには，これまでに作ったリスニング問題や既存のリスニング問題などを見て，それらがどのようなプロセスで解答可能となるかを一度考えてみるといいだろう。より具体的には，音声テキストのどの部分をどのように理解できるとその問題が解答できるのかを考えるということだ。

聞き取るべき箇所も，1カ所だけを聞き取ればいい場合と，いくつかの箇所を聞き取って統合しなければならない場合とがある。また，それらの箇所の理解も文字通りの理解でいい場合と，行間を読んだり発話意図を推察したりしなければならない場合とがある。こうしたことを行っておくことは，テスト問題の作成のみならず，指導を考える際にもとても重要なことである。これによって養った視点を自分のテスト作りにも役立てるといいだろう。

4. 「概要や要点」の聞き取りをどう問うか

現行の学習指導要領では，「まとまりのある英語を聞いて，概要や要点を適切に聞き取ること。」という指導事項が新たに加えられた。では，「概要や要点」の聞き取りはどのようにテストしたらよいのだろうか。「概要と要点」の定義は必ずしも簡単ではない。以下に，その定義を試みる。

まず，「概要」とは，「話されたことのおよその内容」であるから，どれか1つだけの重要な点というより，話の全体像を伝えるようなある程度のまとまりのある内容ということになる。例えば，誰かが，見た映画の内容を話しているような場合は，概要を聞き取ることになるだろう。

これに対して，「要点」といった場合には，2種類の「要点」が考えられる。1つは，「話し手が伝えようとしている最も重要な点」である。例えば，待ち合わせをしている相手が電話をかけてきて，「その日は来られなくなった」と伝えたとする。この場合は，それ以外のことも話していたとしても，「要点」は「待ち合わせには来られない」ということになる。

もう1つの要点は，「聞き手が必要としている点」ということになる。例えば，典型的には空港でのアナウンスを聞くような場合だ。空港のアナウンスでは様々な行き先のフライト情報が流れるが，こうした放送を聞くときには，一般的な聞き手であれば，すべてのフライト情報をまんべんなく聞き取ることはせず，自分のフライトの情報だけを聞き取るだろう。

概要と要点については，これらの違いを意識しながら，指導目標と照らし合わせて，リスニングのテスト問題の作成に当たるとよい。